

壇谷雄高の文学における政治批判

— 「自同律の不快」を手がかりに —

今泉 早織

序

日本近現代文学史上において、「政治と文学」は非常に重要な問題であった。マルクス主義と結びつき、日本共産党とその理念を一にしたプロレタリア文学から、第二次世界大戦終戦直後にあらわれた戦後文学までの流れの中には「政治と文学」にまつわる主題を数多く見いだすことができる。

第二次世界大戦後、いちはやく日本の文壇の主流をかたちづかったのは雑誌『近代文学』の一派である。『近代文学』の同人たちは終戦直後に概ね三十代にあたる世代で構成されていた。プロレタリア文学の影響の下に青春時代を過ごし、それぞれ共産党活動の経験を持った世代である。しかし、一方で彼らは共産党活動の中で幻滅と転向をも同時に経験していた。

鶴見俊輔は『近代文学』が他のグループよりも戦後日本の代表的な論争を多く取り上げ、戦後思想史の中心的な存在になったと

評価している⁽¹⁾。鶴見によれば、その理由は『近代文学』の同人達が敗戦時と全く同じ状況をその十年前に経験していたことにある。敗戦後の日本全体が受けた衝撃は、一九三三年に共産党を支持していた当時の青年たちが味わっていたものと同質のものであったという。一九三三年には、小林多喜二の拷問死、日本共産党スパイ査問事件が起こっている。当時の青年たちは転向の問題や日本民族への不信、集団への不信を抱え、「誰が誰に対しても責任を負わないで右往左往している状況」⁽²⁾へ陥ったという。その後十年、『近代文学』の世代はこの一点に立ち続け、敗戦というタイミングを捉えたのである。

『近代文学』の同人たちは雑誌の基本性格として八つの事項を定めている。その中には「芸術至上主義」「人間尊重主義」「政治的党派からの自由確保」「イデオロギイ的着色を払拭した文学的真実の追求」などが含まれており、これらの項目から『近代文学』が、政治から独立した芸術としての文学の確立を求めていたこと

がわかる。事実、『近代文学』からは政治の要素は一致して排された。そのことを同人のひとりである埴谷雄高は『近代文学』の「最も特徴的な考え方」であると述べている⁽³⁾。

当時の『近代文学』の目標は、藏原惟人と小林秀雄を足したものを超えることであつた⁽⁴⁾。既存のマルクス主義には論理的イデオロギーがあるものの、人間自体についての思索が足りず、人間の心の奥底を知ることができないと『近代文学』の同人たちは考へていたという。そのため、その領域を覗き込んでいる小林秀雄と、当時の共産党活動の主導者であつた藏原惟人を足したものを超える、というのが基本的な方針となつたのである。

そのように「政治と文学」というテーマを色濃く含む『近代文学』の中でも、埴谷雄高は特異な位置を占めている。主に批評が多かつた『近代文学』の中で長編小説『死霊』を連載している珍しい存在であつたうえ、そのテキストの難解さゆえに、同じ『近代文学』の同人たちにも当初はあまり理解されなかつたという。

埴谷は『近代文学』の同人たちに向かつて「政治的信条は自由とす」という提言を行つている⁽⁵⁾。その埴谷自身は戦後、選挙活動も含め、徹底して政治的活動から退くこととなるが、「政治と文学」は、恐らく彼らすべてにとつて最大の直接的課題であつたが、その解きかたはそれぞれ異なつてゐる。そして、その異なつたかたちのひとつの片隅の極端として、恐らく私なども数えられらるだろう⁽⁶⁾と述べており、埴谷の作品の中に「政治と文学」の

問題が含まれていることは疑い得ない。

本稿ではそういった観点から、埴谷雄高がどのように「政治と文学」の問題に独自に取り組んでいたのか、埴谷独自の造語である「自同律の不快」を手がかりにして政治批判、ひいてはその政治をおこなつてゐる組織に対する批判を追つていきたい。主に植民地経験と共産党経験をそれぞれ参照し、私があるということ、私と他者があるということの二つの事態をそれぞれ検討して行く。

一 自同律の不快

「自同律の不快」は埴谷独自の造語であり、その創作の中核を成す重要な言葉である。自同律とは同一律のことであり、「AはAである」と言いあらわされる。その自同律にまつわる不快、特に「私は私である」ということについての形容しがたい不快を「自同律の不快」と呼ぶ。

この語についてはすでに埴谷自身がかなりの自己註釈を行つてゐるうえに、先行研究も多くなされてゐる。しかし、そもそも「自同律の不快」は感覚的なものであつたことに留意しておく必要がある。埴谷自身、「自同律の不快」はまず嘔みしめていなければならぬものであり、変容も反逆もその後に出てきたものであると述べている⁽⁷⁾。「自同律の不快」は、それ自身に付された

膨大な自己註釈や他の解釈に「いい換え可能なある基本原理」⁽⁸⁾であって、解釈の仕方はいくらでもあるにせよ、ひとつの解釈そのものではない。そのため、「不快」から導き出される論理がそれぞれ矛盾していることもまたあり得る。そのことを踏まえたいうで、いくつかの「不快」の描写とその解釈を追っていくことにしよう。

まず最初に、感覚的なものとしての「不快」について見ていきたい。作中の中心人物である三輪与志は、子どもの頃、森の境などで遊んでいるときに森のどこから微かな地響きのような気配を感じたという。その気配は「駆り立てるような気配」であり、「如何に泣き喚いて駆け出そうとも、そこからの逃亡は不可能だと思われるような気配」⁽⁹⁾と描写されている。その気配は彼が成長するにつれて論理的なかたちをとってくるようになる。その気配は、不快を嘔みしめている事物が放つ呻きと関連したものである。人間のみならず、すべての事物が自らの「ある」という不快を嘔みしめて生きてるように感じられる。

自己が自己へ重なつて、或る叫びを叫び上げようとして叫び得ぬ瞬間瞬間を凝つと嘔みしめている或る姿勢の気配なのであった。《俺は——》と云いかけて、自身を嘔む奇妙な響く顔を保ちつつづけている忌まわしい表情のもたらす或る怖ろしい呻きなのであった。彼の部屋のなかの一つ一つの

物体がそれ自身の不快を忌まわしく嘔みしめている——。

この名状しがたい不快は、彼にとつて、思惟の法則自体に潜んでいる或る避けがたい宿命のように思われた。それは、思考する人間のみが味わう深淵なではなかった。⁽¹⁰⁾

このように物体の呻きに囲まれるという感覚は、「一種論理的な感覚」と言いあらわされている。「不快」が論理的なかたちをとつてくるという経過は、埴谷が投獄され、カントを読んでいたときの体験と重ね合わせて読むことができる。埴谷は投獄されているあいだにドイツ語の勉強として『純粹理性批判』を讀んでおり、自らの抱える「自同律の不快」ゆえに「先驗的弁証論」の世界にのめりこんだという。埴谷はカントの「仮象の論理学の推論」は「自同律の不快に悩みつづけてきた私の暗い氣質の論理化された世界」のように思えた、と語っている⁽¹¹⁾。

それゆえ、先行研究の中では、この「先驗的弁証論」と関連して、論理化された「不快」とは、自我としての「私」と、実体としての「私」の同一性の証明不可能性であることが指摘されている⁽¹²⁾。本稿では埴谷のカント受容の詳細については立ち入らないが、ここで自らが「ある」ということにまつわる不快がどのような論理化されているかについて、簡単に確認しておきたい。

熊野純彦はカントを引用しつつ、埴谷の不快の論理化について、以下のように述べている。

カントが「不都合 Unbequemlichkeit」と呼んだ、そのことの消息が、埴谷雄高が「不快」ととらえた事情の原型のひとつとなっている。カントの小論文から引用するなら、「私が私自身を意識することは、主観としての「私」と客観としての「私」という二重の「私」をふくむ思考である。思考する私が私を、私自身から区別しうるしだいがどのようにして可能であるかは、端的に説明不可能である。」だが、この両者がおなじ「私」であること、ふたつの「私」がかさなり合うということも、端的に説明不可能なことがらなのだ。それ以上の説明をこぼむこの「事実」——いつけん「疑いのない事実」——が、埴谷にあつては「不快」となることだろう。(13)

このことは、『死霊』の登場人物である黒川建吉の言葉にもあらわれている。筆者の病気による断絶を経る前の一九四七年から四八年にかけて発表された『死霊』第三章で、黒川は一匹狼の革命家、首猛夫と対話する。黒川は自身に重なるときの不快は無限大であると言ひ、人類の今までの思考は思惟する「私」と存在する「私」が重なっているという前提のもとに成り立つてきたということの説明して以下のように述べる。

せめて自身を自身の抛り所としなければ、嘗て人間は何も考えられなかった。自身をいたわり、温め、甘やかさなければ、自身の位置の判定がつかなかったのです。行動の基準が立たなかったのです。自分が思考していると確信出来なかったのです。(14)

その上で黒川は、そのような人類の意識は変革されなければならないとする。それこそが三輪与志の課題であった。つまり、人類は自己の意識と存在を重ね合わせることを自らの思考と行動の出発点とし、そのことによつて世界に密着することができた。結果として人類は「全世界からひき裂かれる孤独」から逃れることができたのである。しかし、三輪与志はその際に起こる自己に対する無限大の不快に耐えかね、逆に孤独のほうを出発点としたというのが黒川による解釈である(15)。

このように「不快」は、自らの存在と意識の同一性の証明が不可能であるという論理として捉えることができる。感覚としてあった「自同律の不快」が、牢獄でのカントとの出会いにより、主観としての「私」と客観としての「私」の乖離というかたちで論理化されるに至ったのである。ここでは、「私」という個人があるということがまずそうした分裂を含んでいる状態であるということを確認しておきたい。

二 植民地経験と共産党経験

埴谷は後年、対談を多く行うようになるが、その中ではしばしば「自同律の不快」と幼少期の経験を絡めて語っている。台湾製糖という製糖会社に勤めていた父親の關係で、埴谷は二歳から中学に入るまでを植民地時代の台湾で過ごし、植民地での経験が後の革命志向に繋がっているという。植民地の台湾で、日本人は台湾人を相手に横暴をはたらいていた。台湾人の引く車に乗っている日本人が方向を変えさせるために台湾人の頭を蹴ったり、勝手に台湾人の売っている品物を値切つてそれ以上は渡さなかつたりする姿である。埴谷は大岡昇平との対談の中で幼少期を振り返つて以下のように述べる。

僕の自覚のいちばん初めは、最高に悪いやつは日本人である、日本人であることはとても耐えがたいことであるということだった。自殺とか心中という観念は、今から考えると不思議だけど、幼年時代から少年時代にかけてはごくまわってしまった。もう少し大きくなれば、資本主義とか植民地制度とか、いろんなことがわかつただろうけど、まだ子どもだったから、いきなり蹴つたり、向こうの要求してる金額をやらなくて、これでいいと自分が金額を決めて、向こうがさらに要求すると「バカヤロー」と言つて殴つたり

するのを見て、ほんとに日本人であることがいやになつてしまつた。それがやほりのちの革命志向に通じているね、今から考えると。(16)

こういった出来事は埴谷の中に「日本人」に対する嫌悪を植え付けていった。しかし、埴谷はその中で、自らも日本人であり、台湾人にとっては迫害者である、という自己嫌悪に陥る。それは「日本人」という共同体の中にある「私」への嫌悪であるといえるだろう。そのために少年の心に自己嫌悪に端を発する自死、つまり自殺や心中が浮かび上がってくることとなる。

「日本人」という集団は「私」そのものではないが、「私」は「日本人」であり、「日本人」から切り離され得ない。ここに、自分とずれている自分のかたちが見出し得るのである。

「自同律の不快」を、「私は」と表白している主体が「私である」という賓辞と重なり合わない不快としてとらえる場合、それはこうした植民地における実体験に即したものととして考えることができる。つまり、この不快は「私」という文字通りの人間個人が感じている気分のみならず、「他者との關係」の中にも見いだすことができるのである。

磯田光一は、埴谷のいう「賓辞」を述語的類概念と解し、「類概念への主体の帰属關係」を指摘している⁽¹⁷⁾。「私は私である」における「賓辞」の部分には、私が帰属する類概念が入るといふ

のだ。磯田は「私とは何か」から「私はどこへ属するか」という問いを導き出している。

植民地経験を経て、埴谷は「日本人である」という賓辞と自身のあいだのずれを見いだした。そこで自己が賓辞と重ならない不快と、純粋な自己への回帰の欲望との執拗な葛藤を味わうことになるのである。

自分が自分であることにまつわる一種名状しがたい不快である「自同律の不快」は、ただ単に自分そのものに対する身体的かつ気分的不快ということだけではなく、他者との関係、全体と個人の関係についてまわるものともいえそうである。具体的には、それは植民地における日本人という全体―埴谷という個の関係に見いだすことができる。

このことは埴谷の重要な問題意識であり、『近代文学』がテーマとしていた政治の問題へ繋がってくる部分でもある。埴谷が最も批判的であった問題として、政治における「階級構造」が挙げられる。この構造に対する批判は、埴谷の政治批判の中枢を成している。そもそも埴谷が共産党活動へ従事しはじめたきっかけは、レーニンの『国家と革命』を読み、それに反駁できなかったことにある。レーニンは階級制を廃すことは一朝一夕にはできないと考え、革命と過渡期を経てから国家が次第に死滅していくことを主張した。その「国家の死滅」という概念に賭けて埴谷は共産党活動へ飛び込んでいったのである。

前述したように出獄・転向後、埴谷は一切の政治活動から身を引いているが、『死霊』の断絶中にスターリン批判である「永久革命者の悲哀」をはじめ、いくつかの政治論文を書いている。主に批判されるのは「階級制」であるが、それはある意味では「組織悪」といえるだろう。ここで批判されている「階級制」は政治を行おうとする「党」の組織構造でもあるからである。埴谷は「政治」は権力のピラミッドの上に成り立っていると考えていた。実際、共産党内では非党員と党員、上部機関と下部機関のあいだに「階級の差異」があった。埴谷は常にそういったことを意識しており、「永久革命者の悲哀」の中で以下のようにいう。

私が未来について考えるようになって以来、私の頭蓋のなかで絶えず気にしていることは、何を見ても、そこにはどのような上下関係と認識力があるかという問題なのであった。(18)

埴谷の政治的苦悩は、現在の「中央集権民主主義」の中には「階級の差異」が積み上げられているということにあった。その中には自己否定の要素は全くなく、転覆されるべき体系の温床となっていたのである。そしてそれを転覆するために入った共産党で、埴谷はまた自らが転覆しようとしてきた体系と同様のものを目撃することとなる。埴谷は自身も仲間も階級社会からもちこん

できた汚点をまだ身につけていると考えたという。そしてその汚点を「絶えず克服しなければならない」とした⁽¹⁹⁾。

「革命の成就を阻害するものは『党』それ自体である。埴谷は『党』による「政治」は永遠に複数で成り立っている、という。そしてその中に属する或る人物は、たとえ自身の胸中にある「倫理の体系にひそかに逆らう」こととなったとしても孤独をおそれ、集団の意志と妥協していくようになる。そのうちに彼は自身の内心の声を見失い、基準を失い、「自身の中に自身を感じなくなってしまう事態に慣れて、内面の苦痛や苦悶を見ぬふりをするところか、まったく、平然とすべてに感じなくなってしまう」のである⁽²⁰⁾。

これは埴谷が「日本人」という共同体と「共産党」という共同体の二つに属し、その双方で組織の暴力性を目の当たりにしたことを考えれば、ごく自然な帰結であるだろう。ここで描かれる不快——共同体に所属する私が、共同体という、より大きな「私」の意志によって屈服させられ、摩耗していく姿は、私と私が重なり合わないという点において、最初に述べた、個人的な感覚から導き出される「自同律の不快」の論理と似てくるのである。

埴谷雄高による党、組織の有機体認識というのは既に先行研究で指摘されているところである。荒木優太は埴谷雄高が「自同律の不快」によって人間個体そのものを一個の組織体Ⅱ有機体として見なす視点を獲得したとし、個人的な人間である「私」と党の類似性について指摘している⁽²¹⁾。

荒木は『死霊』第七章の「最後の審判」と第五章「夢魔の世界」に出てくる「死者の電話箱」のエピソードを挙げ、「自同律の不快」と「組織批判」を検討している。前者は、食物連鎖の中で食べられたものが食べられたものを批判するという裁判を描いたものであり、後者は、ある医学生が死にゆく者の耳にゾンデをさしこみ、分解されていく死者の声をとらえようとする試みを描いたものである。このふたつのエピソードからは、「自己」を様々な方向から追求しようとする埴谷の試みが読み取れる。

前者においては「私」とは食べることで不断に他者をとりこみつつける、いわば「死体の集積」に他ならないことが示される。後者においては、死によって有機体を構成していた要素が無限小に分解されつづけ、「私」がまったく今までの存在とは無関係に散ってしまうことが示されている。このエピソードに登場する医学生《樽の中のヘラクレス》は、のちに電話箱から聞こえてくる声の、最も小さい応答単位について考え始める。それをつきとめるため、自らフラスコの中へ入り、「還元物質」と呼ばれる《存在の単独者》へなるのである。

この二つのエピソードは双方とも、首猛夫という一匹狼の革命家が語るものである。荒木はこの自己の描かれ方を党のアナロジーとしてとらえられるものであるということを指摘している⁽²²⁾。有機体と組織はそれぞれ、元はばらばらの要素から成り立っている

るだけのものに過ぎず、その一時的な核である自己や党が凝集力を失えば再びばらばらに散ってしまふ。

実際、埴谷のテキストの中には政治組織の中の下部組織や地方の支部に対して「細胞」という当て字を用いている箇所がいくつか発見できる。共産党時代の回想によれば、組織の一員であるという意味の「細胞」は当時頻繁に聞かれた単語であった。「あれは細胞？」という質問は当時タブーであったが、それは繰り返し破られたのであった⁽²³⁾。

『死霊』においても、体の一部と全体との齟齬が描写されている。三輪高志は、三輪与志がいつとき手をじつと見つめるようになり、やがて自分の手は自分ではないという結論に達したという話を津田夫人に語る。また、夢魔は高志に向かって、片腕を切り落とし、片足を切り落としてもお前はお前でいられるが、首を切ったらはたしてどうかと問いかける⁽²⁴⁾。手足の切り落としは初期の『不合理ゆえに吾信ず』にも既にあらわれているテーマのひとつであり、ある隠者は自己を追い求めて手を切り落とし、足を切り落とし、最後には影も形もなくなってしまう。ここでは意識と存在のズレを示唆しているのみならず、先の「組織Ⅱ有機体論」と照らし合わせれば、組織において切り捨てられていく人々を暗示しているようにもとれる。組織はひとつの「私」であるにも関わらず、このように一部が切り捨てられたとしても組織は組織でありつづける。このように私が私と重なることのない不快は、私

という個人の存在、そして集団における他者との関係性のなかにもあらわれる。『死霊』の中の前述の二つのエピソードにおいては、純粋な自己を求めた自己解体がおこなわれており、私や組織といったものが実は安定した同一性を保つことのできない、脆いものであることを示している。

三 存在悪の自覚

埴谷は共産党時代を振り返り、党の中に巨大で根強い差別が残っていたと述べている。黨員と非黨員の間にある差別は「敢えて極端化していえば、そこではすべての非黨員はすべての黨員から人間扱いされていなかった」⁽²⁵⁾ほどであった。前節で既に述べたように、埴谷は植民地と共産党の双方において、こうした暴力性を目の当たりにしている。黨員から非黨員へ、日本人から台湾人へと向かう暴力性は自己と外部を区別すること、すなわち、「自己」と「非自己」を強く区別することによって生まれるのではないか。

高橋和巳は自身の埴谷雄高論である「逸脱の論理」の中で、埴谷について「要するに、互いの弱味を抱きあわせて生きてゆく人間関係、自己自身に甘えかかって自己慰藉しようとする人間のあり方に我慥がならなかったただけなのだ」⁽²⁶⁾と述べている。そして高橋によれば、そういった人間のあり方の根底に位置するのは、

まさに「私は私である」という自同律である。高橋の解釈においても、自同律は「私」という個人にのみ適用されるだけでなく、そのまま人と人の関係性にも影響を及ぼすものとして理解されていることがわかる。

「不快」はただ「自分があること」、すなわち自分の実体的存在そのものにまつわるものだけではない。他者との関係における自分、言い換えれば他者と共にあるときの自分のあり方、あるいは自分と共にあるときの他者のあり方にもあらわれるのである。他者とともに「ある」ということは、個としての「私」があるということとは当然また違った意味を持つようになる。それこそが、自らの存在が常に非自己、すなわち他者を侵害しているということに対する自覚である。その変容がはっきりと示されるようになるのは同時代の文学者である武田泰淳の『風媒花』という作品への言及においてである。『風媒花』は、「僕が生きているかぎり、僕はきつとある種の殺人鬼のかたわれであるような気がする」という章句で締めくくられる。埴谷はこの文を折にふれて引用し、自分が生きていること、つまり存在することが他者を侵害するということ存在悪の自覚を強調するのである。『風媒花』が書かれたのは一九五二年であり、朝鮮戦争と併せて埴谷に大きな影響を及ぼした。埴谷は二十世紀は誰が殺人を犯したか、被害者が誰に殺されたか、それがわからない罪に満ちている世紀だとして以下のように述べる。

例えば、私どもは、朝鮮戦争を経験しています。現在の戦争は、単に兵士が砲弾や弾丸を打っただけではなくて、あらゆるものが戦争に動員されるのであって、簡単にいえば、服から靴から帽子から、あるいは、一つの縄、一つの鉄線にいたるまで、全部が戦争の道具となる。当時、ナパーム弾や、小銃の弾丸が、日本で生産されたということを知っているものも、そのとき日本でつくられた一着の洋服、靴の一足までが、戦争に加担しているとは容易に自覚しなかった。すぐは目に見えぬものによって殺人の加担者になっていることを自覚しなかったのです。(27)

そして埴谷によれば、「現実の総体を敢えて眺めなければならぬ」文学者として、武田は自ら深い「悪」のなかにいることを自覚したのである。

『死霊』において存在悪がこのほか強調されるのは、先にも挙げたが、一九八四年に発表された『死霊』の第七章「最後の審判」であろう。ここでは誰かを食べなければ生きていけない生物の姿が微生物に至るまで描かれるだけでなく、生まれてくることそのものが他に生まれてきたかもしれない数多くの兄弟たちの可能性を奪う「兄弟殺し」の罪を負っているのだとされる。

存在悪は『死霊』において、断絶前の二章にすでにその兆しを見せている。三輪兄弟の父であり悪徳政治家である三輪広志は、自身が行っていた「一日一悪」について、他人にその不幸を自覚せしめることだという。

「好いですが、僕が津田と論議しあつた問題の中心点はこういうことです。もし同一瞬間に同一空間を二物が占有し得るようになれば——つまり、謂わば永遠の大調和ともいうべきこの平和な夢想がなんらかの方法でこの世界に充たされ得れば、僕は一日一悪を自分の使命ときめこむ悪徳政治家などに決してならないだろう、とね。」⁽²⁸⁾

私が存在することで誰かを侵害する存在悪の問題は、同一空間に二つのものが存在することができない、つまり私がここにいるかぎり、他者はここに存在し得ないという問題を導き出す。それは視点を広げてみれば気づかないうちに私が戦争に加担しており、顔も知らない誰か他者を殺しているという巨大な構造のなかに取り込まれているということである。また一方で私そのものが同様の構造を持ったものとしてとらえられる。私は食へることも、そもそも存在することによって他のものの出現と存在を阻害しており、その点において「自己」は「非自己」を常に侵害しているといえるのだ。

そのように私が存在したことで存在できなかった「未出現」と、「出現したが消えてしまったものたち」の占める重要性が次第に大きくなるにつれ、これらが「不快」の根拠をも大きく担うこととなってゆく。

政治に話を戻せば、階級構造の中で虐げられ、「敵」と見なされ、消されてしまったものたちが多くいる、というのが壇谷の実感であつただろう。政治という体系に抗し、その中で消えていったものに対して光を当てるということは同時に、個としての私の「存在」が同様に虐げられているもの、消しているものに目を向けることを要請する。

政治とは具体的な現実であるが、そのように自分が侵害していく他者への自覚、つまり自己否定を含まない階級制のあり方はいわば「陋劣」であり、非倫理的である。壇谷に組織解体を志させた「自同律の不快」は同時に個人の「存在」にも自己解体を促す。そういった観点において、戦後文学者として壇谷が直面した「政治」の問題と、自己の実存から考えられた「個人」の問題は二重になっている。「自同律の不快」は、そもそも自己があることにまつわる不快を意味するが、それは単に自身が単独で「ある」ことだけではなく、他者とともにある、関係性の中の不快をも含んでいる。

高橋和巳が指摘した通り、壇谷が関係性の中で嫌つたものは、互いに寄りかかりあうこと、自己を愛し、その自己の延長として

他者を使うこと、また逆に他者に使われることであつた。そこでは私という「個人」の存在論的問題と党に代表されるような「組織」における他者との関係が常に平行して問題となつてゐる。「個人的」―「社会的」という一見対立して見えるこの構造が埴谷において一致したかたちを示しているということは興味深い事実である。なぜなら、私たちが集団の中にあるとき、また私一人だけであるときという事態に即してどうあればよいのかという問題を同時に明らかにしてくれるように思われるからである。

結

本稿では、埴谷文学における「自同律の不快」が、植民地経験や共産党経験と結びついており、個人と集団の双方において見いだされるものであることを述べた。そもそも「自同律の不快」は感覚的なものであり、噛みしめていなければならないものではあるものの、カントとの出会いや植民地経験、共産党経験を経て、個人や組織の問題をその背景に含むようになったのである。

埴谷は小川国夫との対談の中で、調書の上に事実が「つくられてしまふ」取り調べの事実を回想している⁽²⁹⁾。取り調べをおこなう警察官は自らの用意した「事実」に相手を回収しようとし、一片の事実を探り続ける。そうやって相手に与えられた「作り上げられた事実」の中に自分はまったく埋もれてしまひ、そして二度

と発掘されることはない。取り調べの中で、埴谷は、いかに「事実」が「発見、発掘」困難なものかを知つたという。そして、そのとき埴谷が知つた「恐ろしい事実」とは、一人の人間が他の人間の「事実」を知ることが絶対に不可能だということであつた。そうして闇に葬り去られ、二度とわからなくなつてしまつた人々を、組織の暴力性によって消されてしまつた他者として、埴谷は問題にしている。埴谷はその「言葉」を誰にも受け入れてもらえなかつた死者の死を世に訴えるすべは存在しないのだ、という。

また、興味深いのは、同じく『近代文学』の同人であり、戦後も共産党を支持する立場にいた小田切秀雄が埴谷との対談の中で示した「自同律の不快」の政治的文脈における読みである。連載当初から埴谷の小説は難解であり、同じ『近代文学』同人たちにも理解しがたいものとして扱われていたが、後年その意味がわかつてきたと小田切は言う。それは転向体験に重ね合わせられているのである。転向の時代とは、自分が自分であることの確信を持たなくなる時代であつた。ひとたび捕えられ、拷問にかけられるかもしれない。自分が自らのコントロールを脱し、自らだと信じていたものとは違うものへと変貌する。「俺は俺だ」という論理は転向の時代においては常に不安にさらされている、と小田切は理解した。抽象的な「自同律の不快」の背後に、「痛切な時代的な体験」を見いだしたのである⁽³⁰⁾。

自らの意識と存在の同一性を明言することのできない「自同律の不快」にせよ、政治的背景を持った「自同律の不快」にせよ、埴谷は「自己」というものを言い切ることができなかった。そして、政治組織や集団における「自己」と「非自己」を区別する意識が生む暴力性や、自らが存在することが常に他者を侵害する、自己の存在が持つ暴力性を考えることとなったのである。

「不快」は組織と個別の存在者の双方を同時に問題にしており、「組織悪」を見つめることで、必然的に、存在するだけで他者を侵害するという自身の「存在悪」を見つめることとなる。『死霊』において、埴谷は政治では行えなかった自己解体、存在の革命の思考実験を試みている。

「悪」は自覚しても克服できるものではない。しかし、埴谷は文学において、その「悪」に対する反逆のヴィジョンを示さなければならぬと考えたのである。その文学的出発を支えてくれたのがドストエフスキーであった。埴谷は現実世界では下に見られているものがドストエフスキーの小説の中でそれぞれの思想に裏付けられて自らの生の意味を主張しているという点に感銘を受ける⁽³¹⁾。このようにおとしめられたものたちを救いあげることができなのが文学である、と埴谷は考え、自らもまた文学における「復権」を志した⁽³²⁾。そういった埴谷の試みは政治における党内での人々の要否や、言葉によって埋もれていってしまう人々の姿を見てきたことに由来するだろう。自己を規定することも、他

者から規定されることも不快であったために、埴谷は政治から離れて、ひとり「自己」とは何かを問うこととなったのである。

「永久革命者の悲哀」の中で埴谷は「全体の意味を問うて、根本的な顛覆を試みるなら、まず自分自身を顛覆しなければならぬ」と述べている。埴谷の中では、政治的革命は、そのまま自己を否定し、解体する試みとつながっている。戦後、埴谷は政治運動からは遠ざかったが、彼が生涯変わらず課題とし続けたものは階級構造と権力の克服であり、その文学の中では政治の中で果たせなかった革命と自己解体、自己追求の思考実験が行われているといえるだろう。

※引用にあたって一部旧字から新字に改めた。また、本稿における埴谷雄高の引用は『埴谷雄高全集』（講談社、一九九八〜二〇〇二）に依る。注では「全集」と略記した。

注

- (1) 鶴見俊輔『鶴見俊輔著作集—思想』「戦後日本の思想」、筑摩書房、一九七五年。
- (2) 鶴見、前掲書、二五七頁。
- (3) 埴谷雄高『埴谷雄高全集—不合理ゆえに五信ず』、「近代文学—創刊まで」、講談社、一九九八年、五六三頁。

- (4) 埴谷雄高『埴谷雄高全集十六・二つの同時代史』〔Ⅷ〕「近代文学」の創刊と第一次戦後派」、講談社、二〇〇〇年、一九四頁。
- (5) 全集一、「近代文学」創刊まで、五六五頁。
- (6) 全集一、「あまりにも近代文学的な」、四〇三頁。
- (7) 埴谷雄高『埴谷雄高全集十五 思索的渴望の世界』、『不合理ゆえに吾信ず』から『死霊』まで」、講談社、二〇〇〇年、三四〇頁。
- (8) 全集十五、同頁。
- (9) 全集三、『死霊』〔死の理論〕、一二四頁。
- (10) 全集三、一二六頁。
- (11) 埴谷雄高『埴谷雄高全集七 ドストエフスキイ』、「カントとの出会」、一三三頁～一三四頁。
- (12) 鹿島徹『埴谷雄高と存在論』「第一章 『死霊』の懐胎」、平凡社、二〇〇〇年。熊野純彦『埴谷雄高―夢見るカント―』「第一章 宇宙的気配―夜― 三 背景」、講談社、二〇一二年。
- (13) 熊野、前掲書、七一頁。
- 引用文中におけるカントの引用は、カント『アカデミー版全集』第二〇巻、二七九頁による。
- (14) 全集三、『死霊』「屋根裏部屋」、二七四頁。
- (15) 全集三、同頁。
- (16) 埴谷雄高『埴谷雄高全集一四 わが文学、わが昭和史』「A少年」とA夢魔V」、講談社、二〇〇〇年、四七九頁。
- (17) 埴谷雄高『埴谷雄高作品集 別巻 埴谷雄高論』磯田光一「自殺の形而上学」、河出書房新社、一九七二年、四二二頁。
- (18) 埴谷雄高『埴谷雄高全集四 永久革命者の悲哀』「永久革命者の悲哀」、講談社、一九九八年、一三三頁。
- (19) 全集四、一三三頁。
- (20) 全集四、「政治の中の死」、五五八頁。
- (21) 荒木優太『埴谷雄高と小林多喜二』、ブイツーソリューション、二〇一三年、一六〇頁。
- (22) 荒木、前掲書、同頁。
- (23) 全集四、「或る時代の雰囲気」、四二七頁。
- (24) 全集三、『死霊』「夢魔の世界」、四八〇頁。
- (25) 全集四、「敵と味方」、六二四頁。
- (26) 『埴谷雄高作品集 別巻 埴谷雄高論』高橋和巳「逸脱の論理」、三五頁。
- (27) 全集一五、「現実密着と架空凝視の統合」、三四六頁。
- (28) 全集三、『死霊』〔死の理論〕、一一八頁。
- (29) 埴谷雄高『埴谷雄高全集十七 隠された無限』、「永生と永死」、六二～六三頁。
- (30) 全集一七、「証言・昭和という時代」、一七〇～一七二頁。
- (31) 全集一五、「思索的時代」への渴望」、二八六頁。
- (32) 埴谷雄高『埴谷雄高全集十八 生老病死』、「魂の渴望」、講談社、二〇〇一年、二六九～二七〇頁。
- (33) 全集四、四十二頁。

(いまいずみ・さおり 筑波大学大学院

人文社会科学研究院)